

『恨の介』覚書

菊池真一

「恨の介」の主題については、説得力に富んだ鈴木享氏の(注1)論考があるが、恨の介・雪の前の捉え方については、やや考えを異にする点もあるので、私なりに「恨の介」を把握してみたと思う。

一 前後照応

「恨の介」を讀むと、似たような趣向が前後相照応して現れるのに気がつく。

自明のことであるが、庄司が後家の長話に出てくる、秀次の妻妾たちの最期は、「恨の介」の結末部、後家・菖蒲の前・紅の自害の伏線である。伏線というには余りにも露わな類似であり、鈴木氏のごとく、ここに作者の意図を見ようとするのは当

然であろう。

恨の介は、雪の前からの返書に織り込まれた謎言葉を解くことができなかった。考えてみれば、これも後朝の別れに際しての雪の言葉の謎を解くことができなかったことの伏線と言えるであろう。

二人の初めての会話は、雪の前の「葛の葉の恨と云は誰やらん」に対して、恨の介の「君の情の無き身なりせば」であった。これも冗談が現実になってしまうという点で、伏線の一種となろう。この応答のようなゆとりを恨の介がずっと持ち続けているれば、悲劇は起らなかったはずである。

前後の照応で大事な言葉に「大方」がある。恨の介が初めて雪の前に書き送った恋文の最後の方に、(注2)

さ、がにの糸繰り返し繰り返し、及ばぬ恋と思し召し、

たゞ大方に思すなよ。

とある。それなのに雪の前は「大方に」考え、悲劇的結末を迎えることになる。恨の介の遺書を示されて発する雪の前の言葉は、

こは何事ぞや、恨めしや。菖蒲殿も聞き給へ。其あか月自らにすがりつき、恨殿の給ふやうは、「又いつぞ」とありし時、只大方と思ひ、「後生にて」と申せしを、嘆き給ひて空しくならんとは、夢共知り參らせず

というものである。一途に思いつめた恨の介と、普通の変愛と考える雪の前とのギャップがここにある。

恨の介の人物造形にも留意が見られる。世人が遊樂の場として寺社を訪れるのに対し、恨の介は、「もとより観世音の御替あらたに思ひける事なれば、」と信心深く描かれている。奇跡的な二人の結び付きを達成させるためには、観音の靈験が必要であった。色深き男グループの一人であるはずの恨の介が、孤独な存在として登場しているのもこのことと無関係ではなからう。これらの点を考えると、作者は周到な構想をもってこの作品を描いたと想像される。

二 雪の前をめぐる

仮名草子作者は、もとより作中人物の心理を描こうとはしていない。しかし、その行動などから心理を推測し、読み取ることは可能であろう。

菖蒲の前から事情を説明されて、雪の前は禁じられた恋であると躊躇するが、観音の靈力によるものであるとの菖蒲の前の重ねての言葉に、文を開き見る。このあたりまで、即ち上巻は、観音の力によって大きく支配されている。雪の前が禁を破るのもやむなしの感が強い。だが、下巻に入るとこれは極めて人間的なわざである。結末に到るまで、神仏はほとんど意識されることがない。

後朝に際し、恨の介は別れを惜しんで取り乱す。対して、雪の前はこれをさすかのように冷静に別れの言葉を述べる。

はや後朝の袖となれば、互に名残のおしやられて哀なり。恨の介涙ながらに申けるは、「御情の程、世々万世を重ねても、名残の尽るにもあらず」とて、涙ながらに申ければ、姫仰せけるやうは、「自らが肌馴れし給なり。心あらば移り香よ自らに添ふと思し召され候へ。重ぬる袖もあらばこそ」と、涙ながらにの給へば、いよ／＼恨の介は思ひに伏し沈み、泣くより外の事は無し。誠に古松浦佐用姫のひれ伏せし姿は石になるとかや。我も願はくは石ともなり、御

庭の踏石ともなり参らせ、君を見参らせたまき程と悲しめど、さすが石ともならざこそ、雪の前殿仰には、「会者定離の習、素より驚くべきにあらず。拙き女の身さへ、かくと思ひ参らせする。名残は我も同じ事、さらばは」との給へば、恨の介袖にすがりつき、「またいつぞ」と申ければ、雪の前殿「後生にて御見参に参り候べし」と仰せければ、涙にむせぶ御別れ、見るめもあはれなるべしや。

前節で触れたように、恨の介の死を知らされた雪の前は、

「只大方と思ひ、『後生にて』と申せしを」と言っているのだから、心底拒絶のつもりで「後生にて」と言つた訳ではなからう。「重ぬる袖もあらばこそ」「会者定離の習、素より驚くべきにあらず。」は、まともに読めばいかにもきつい表現だが、ストリートに解釈するのは野暮。恋の駆け引きというものであろう。

雪の前も「涙ながらに」という状態であり、「名残は我も同じ事」と言っており、肌小袖を与えてもいるのである。心と言葉の乖離を思うべきである。極言すれば、水田潤氏の言われるように「媚態」ということになるのだが、「後生にて」は、恨の介の再度の求愛を期待した誑言葉であつたと言えよう。鈴木氏は「後生にて御見参に参り候べし」を「敢然と拒否し」たものとし、「もう此の世では逢ひませぬ」と訳されるが、それほど

強い意思を表明したものとは思えない。直訳的に「あの世でお会いしましょう（＝またいつか会いましょう）」でよいのではなからうか。そもそも一夜の歡喜の後に、突如永遠の別れを告げるとはどういうことなのか、理解に苦しむのである。

恨の介は余りにも一途であつた。余りにも真剣であつた。思いを遂げた歡喜にうちふるえ、かつ禁断の恋におののいていた。結果、雪の前の言葉をまともに受け取り、悲惨な最後を迎えることになる。

雪の前は恨の介の死をどう受け止めたか。

其あか月自らにすがりつき、恨殿の給ふやうは、「又いつぞ」とありし時、只大方と思ひ、「後生にて」と申せしを、嘆き給ひて空しくならんとは、夢共知り参らせず。

と言つた後、自責の念からかショック死してしまう。恨の介の側からすれば、鈴木氏の言われるように「劇的な恨の介の勝利」であらうが、「雪の前の愛情はその程度のものである。」としたのでは、雪の前は浮かばれないであらう。恨の介に強く心を寄せていたからこそ強く自責の念を抱き、恨の介を追う形になつてしまつたのではなからうか。

三 恨の介の恋

そもそも、「都に隠れもなく、色深き男ども」グループの一人であった恨の介が、どうして「一段心細き者」となり、孤独に没り、神仏を真剣に祈り、雪の前にのめり込んでいくのであろうか。また、後朝の別れに際して、何故あれほど取り乱し、見苦しい態度をとったのであろうか。

恨の介は、「色深き男にて、常々に六条辺へ通ひしが、もしも流れを立つる遊び物にも心を引かれありなん。」と友人に思われるようなプレイボーイであった。女には不自由しなかつたはずである。それが、雪の前を一目見てからひたすら恋い焦がれるようになったのは、本物の恋、純粹な愛に飢えていたからではなからうか。遊びの恋からは心の安らぎは得られなかつたのである。これが、雪の前に対した時の恨の介を余りにも純真かつ盲目的にさせている。後朝の別れの雪の前の言葉の謎を解くことができなかつたのは、恨の介の教養不足もあるだろうが、余りにも真剣になりすぎ、余裕をもたなかつたためとも思われる。誤解を引き起こしたのは、「たゞ、大方に思すなよ。」という恨の介の真剣さと、禁断の恋意識と、叶わぬはずの恋を成就し

た夢心地とであらう。

雪の前のような上臈との危険な恋に己をかねねばならぬほど、恨の介は孤独で虚しかったのであろう。「恨の介」とは、己の宿命を恨む他ない、主人公のそして作者自身の嘆きを意味する。このような主人公を設定した作者の心中は余人にはなかなか伺い知れないのであるが、世間に背を向けた「日蔭者」^(注6)的存在であつたことは間違いないからう。

注1 「恨の介」の主題と構成（国語と国文学）昭和五十六年十一月号）

2 本文引用は、日本古典文学大系（岩波書店）による。

3 「仮名草子の世界―未分化の承譜―」（昭和五十六年。桜楓社）

4 「恨の介」と「薄雪物語」（島根大学文学部紀要文学科編）第十一号。昭和五十二年十二月）

5 注1に同じ。

6 注4に同じ。

付記 本稿は昭和六十二年度前期、立命館大学における演習のまとめである。出講の機会をお与え下さった水田潤教授に感謝申しあげるとともに、力量不足のため、演習の成果を十二分に反映できなかったことを学生諸君にお詫び申しあげ